

+ 24 【こうもんさま】

尻の穴が痒（かゆ）くてたまらなかったので、母親に頼んで中山で薬草（やくそう）を採ってきてもらって、塗ってみたけれども利き目がない。

「かいちゅうかのう」

ぼくは虫くだしを飲むと、尻の穴から回虫がでてくるので、そのせいかとかんがえました。

でも回虫はでてくる心配がなく、尻の穴はどんどん痒くなります。

屁をしたらなおるかとおもって気張ると、おならはでないで、うんこがでます。

いくらうんこをしても、痒みはどうにも止まらない。

小学校に行っても気になって、勉強どころではない。

尻の穴を搔（か）いたり弄（いじ）ったりしてばかりいるので、女の子は、

「きんちゃん、ふけつ」

というし、男の子は、

「きんちゃん、くさい」

といいます。

ぼくだって、いじりたくていじっているわけではありません。

「もしかすると【かゆうん】が取り付いているのかもしれないね。そうになったらやっかいだね」

母親がそういうので、困ったもんだとおもって懐爺に助けを求めました。

「【かゆうん】は、清潔好きなおばけですから、そんなところにはでません。尻の穴ということは、【こうもんさま】の可能性ががあります」

「ならば、いんろうをみせればなおるかのう」

「水戸黄門様ではなく、肛門様。これは赤ちゃんのおばけです。金ちゃんの好きな隣のお姉さんが、去年だれの子かわからない男の子を産みました。けれども肛門がないので、哀れにもすぐに死んでしまいました。この子が【こうもんさま】というおばけになったのです。自分がない肛門が他人にあるのをやっかむんですね」

「せつないのう」

ぼくは隣のお姉さんの憂い顔を思い起こしました。

「金ちゃん、どうしますか」

懐爺がぼくの顔をのぞきこみます。

「このままでええ。わしには、かわいそうで【こうもんさま】をたいじ
できん」

「やはりそうですか。それなら金ちゃん、【こうもんさま】を上手に成仏
させてあげてください。【こうもんさま】は新しいおばけですから、もの
わかりがいい。その機会はいずれきっとやってきますから」

それから一週間経った夜中、(小さな電球ひとつだけにした)薄闇のな
かで、ぼくがふとんに入って漫画を読んでいるとき、何となくなまぬる
い風が吹いてきたとかんじたら、いつか障子がすこしだけ開いています。

そしてふと気づくと、ぼくの枕元に、ひとりの赤子がちょこんと座っ
ていました。

裸で、とても色が白い。

「もしかしておまえは、【こうもんさま】かのう」

そうささやくと、

「きんちゃん、こんばんは。はじめまして。ごめいわくをおかけしてい
ます。ぼく【こうもんさま】です」

赤子は丁寧に御辞儀(おじぎ)をしました。

「あかちゃんなのに、しゃべれるんか。えらいのう」

「はい。ぼくがおなかにいるとき、おかさんが、やさしくいろいろはな
しかけてくれましたから、ことばをおぼえました」

ぼくは隣のお姉さんの優しい横顔を思い浮かべました。

「それはよかったのう。それで、こんやは、なんのようかのう。わしの
しりのあなを、もっとかゆくしようってえのかい」

ぼくは母親を起こさないよう、声をさらに落としてききました。

「きんちゃんにおねがいがあります。こういうことができるのは、きん
ちゃんだけだとみこんでの、こころからのおねがいです」

赤子である【こうもんさま】も囁き声です。

それでもさすがにおばけですから、薄闇のなかで不気味に響いていま
す。

「わしは、おねがいされると、ことわれないせいakuanじゃ」

「それは、よかったです。おねがいというのは、つまりその、ぼくのおしりに、あなをあけてくれませんか」

【こうもんさま】は、じつにじつにいいにくそうにいました。

「そういうことなら、ええよ。やったる」

ぼくは即座に答えました。

肛門がないのはよほど辛かろう。

痒いのなんかそれにくらべれば屁みたいなものだ。

「あなをあけるどうぐが、どこかにありませんか」

「ほうちょうとか、きりとかはあるけど、いたそうじゃからのう」

つぶやきながらぼくはおもいついて、起き上がると忍び足で風呂場の方に行きました。

そこに、火を熾（おこ）すための竹筒（たけづつ）があるのです。

それを持って戻って来て、【こうもんさま】に見せると、

「これはいいですね。それでは、これでおねがいます」

というので、竹筒の尖端（せんたん）を赤子のお尻のあたりに押し当てて、

「いたいかのう。だいじょうぶかのう」

といいながら、反応を待っていますと、

「だいじょうぶですよ。ひとおもいにやってください」

というので、渾身（こんしん）の力で突き刺しました。

竹筒がめりこみ、そこを穿（うが）ち、【こうもんさま】はひとしきり叫びましたが、それは悲痛の声にも喜悦の声にもきこえました。

頼まれたわけではなかったけれども、

「そうせよ」

と、なんとなく何者かにいわれた気がして、ぼくはそのまま竹筒に口をつけ、火を熾すやりかたで、おもいきり何度も、空気を吹き込みました。

【こうもんさま】はみるみる膨（ふく）らみはじめ、そのうち巨大な風船となって、障子をぶちやぶって外へ飛んで行きました。

「おうい、どこへいくんじゃ」

ぼくが呼びかけると、

「おかげさまで、てんにのぼれます。きんちゃん、ほんとうに、ありがとうございました」

という声もきれぎれになり、そのままお月様のほうに昇って行ってしまいました。

【こうもんさま】がいなくなると、ぼくは妙に淋しくなり、漫画を読むのはやめて眠ることにしました。

翌朝ぼくは、母親に、障子がめちゃくちゃに壊れているわけをたずねられましたが、

「わしがねぼけて、ぶちあたったんじゃ」

と自分のせいにしておきました。

そうそう、もちろん尻の穴の痒みは、すっかり消えていました。